2022年６月21日号

桜蔭会便り

発行 一般社団法人桜蔭会

東京支部 春の公開講演会(2022年５月14日)報告

東京支部　公開講演会　　2022.05.14　@同窓会コモンズ４階

衣〈ころも〉と心〈こころ〉　―染織史をつむぐ絆―

京都国立博物館学芸部 企画・工芸室長　山川曉(あき)氏（平３哲）

京都から山川曉（あき）氏を講師にお招きして講演会を開催いたしました。会場参加者は34名、オンライン参加者（Zoomによる同時配信）は25名の盛会となりました。

山川曉氏は、お茶の水女子大学、神戸大学大学院にて美術史を学ばれ、徳川美術館学芸員を経て、2001年から京都国立博物館染織担当研究員として勤務されています。氏が企画した特別展「高僧と袈裟―ころもを伝えこころを繋ぐ」の図録（2010年）では、日本・東洋美術に関する優れた研究を表彰する第23回國華賞が授与されました。博物館学芸員の業務として作品の製作年代の比定研究があります。今回は、寺院に残されている古い打敷（うちしき）と代々高僧が受け継いできた袈裟の研究を通して、時代を超えて〈衣〉を残してきた人々の〈こころ〉への眼差しについてお話し下さいました。

１　はじめに

京都国立博物館ではその土地柄、お寺や旧家に月一回以上は調査に伺い作品を収集・保存するのが主要な仕事のひとつである。実際に作品を手に取ることができるという大変恵まれた立場にあるので、作品を手にすることができない多くの研究者に有益な情報を届けることを心掛けている。

その中で一番重要視しているのは、「基準作」というものである。工芸史研究では、製作地・製作年代・製作者・製作背景が分かっているものを「基準作」という。基準作の情報、造形要素（織り方・色調・染め方など）を慎重に分析し、その時代特有の傾向を見出すことができれば、情報をほとんど失った他の作品に対しても、その特徴に基づき製作年代などを客観的に語ることができる。基準作の要件としては、製作年代を示す関連文字資料の存在、炭素同位体測定法など科学的な調査による年代測定、製作年代が判明する関連絵画・彫刻の存在などが挙げられる。基準作を見いだして染織品の情報を読みとることが美術館・博物館における染織品の研究の基本的態度と考えている。

２　染織史の基準作　打敷（うちしき）

〇打敷とは

仏前を荘厳にする諸道具を置く机にかけるテーブルクロス。俗人（一般人）から寄進された着物を仕立て直したものが多く、寄進年月日や理由が裏地に墨書されることがある。

〇葡萄棚文様小袖地打敷（奈良・円照寺蔵）

産経新聞社編『尼門跡寺院の世界』（展覧会図録）産経新聞社発行 2009年より複写

13枚の生地が縫い合わされたもので元は小袖であった。裏地に「普門山之公用　東福門院之阿波（法名）法壽院覚雲文圓尼　寄進」と墨書がある。当時の文献の分析から、この文圓尼が東福門院和子（徳川和子、1607～78）の侍女、阿波であり、阿波の事績も確認された。東福門院和子は、徳川二代将軍秀忠とお江の方の娘で、御水尾天皇に嫁いだ人物。尾形光琳の生家の呉服商「雁金屋」に年200領※近い着物を注文していたことが『雁金屋衣装図案帳』の分析からわかっており、日本服飾史における重要人物だが、東福門院が発注したことが確実な着物は知られていなかった。東福門院は自分で着るだけでなく人に贈るためにも着物を誂えていたことが『雁金屋衣裳図案帳』から判明する。図案帳には阿波が寄進した着物に似通ったデザインがあり、打敷となっている小袖も東福門院から阿波が拝領した蓋然性が極めて高い。※領＝着物などを数える助数詞。

〇技法分析

打敷を小袖に復元すると、肩回りに竹矢来があって葡萄がさがっている図柄だったことがわかる。使われている技法は絞り染めと刺繍だけである。鹿の子絞りを二粒ならべて輪郭線を表現する技法は、『雁金屋図案帳』に記される「ふたつぶかのこ」と考えうることから、技法のうえでも、この作品は東福門院周辺の小袖に近似する。

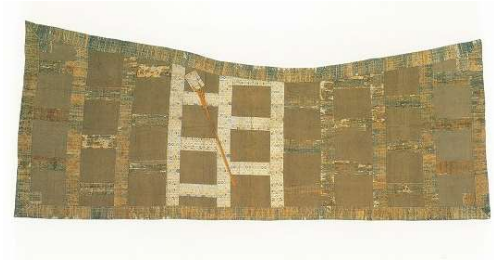
〇御所から市中へ　寛文小袖

東福門院のためだけに記された手書きの『雁金屋衣装図案帳』によく似たデザイン集『御ひいなかた』がほぼ同時期に出版され、寛文小袖という流行を生んだ。こうした文字資料から得られる情報と現存する貴重な作品の染織・刺繍技術を確認することで、当時の寛文小袖の特徴がより明確になる。

3　染織史の基準作　袈裟

〇仏教における袈裟は特別な意味を持つ衣服である。弟子が師から正しく教えを受け継いだことを象徴する、非常に権威を伴う衣服である。玄奘三蔵がインドへの旅路を著した『大唐西域記』にも、また中国禅宗の第六祖慧能（えのう）の宗教的な伝記である『六祖壇経』にも、袈裟は法とともに受け継がれることが記されている。

〇九条袈裟　円爾相伝（京都・東福寺蔵）



京都国立博物館編『高僧と袈裟』（展覧会図録）京都国立博物館発行　2010年より複写

円爾（1202～1280）が開山した臨済宗東福寺に所蔵されている九条袈裟は「伝衣箱」という400年前の江戸時代に作られた木箱に保管されていた。五枚の袈裟が入った引き出しは臨済宗揚岐派の法脈図をも示している。関連する文字資料として、中国・南宋時代の無準師範が、帰国した弟子の円爾にあてた手紙（尺牘）がいくつか残っている。そこには、中国の無準から日本の円爾へ、歴代の祖師が受け継いできた袈裟を贈ったことが記されている。これらの手紙から、無準が円爾に贈った袈裟が木箱の引き出しのうちのひとつに保管されていることが想定

できる。800 年前の人々が、袈裟や手紙を通じて繋がりあっていたことが窺い知れる。
〇緯錦〈ぬきにしき〉の組織分析
錦とは、広い意味では多色の文様織物を指すが、さらに細かく言うと構造上の錦というのがあり、地と文様を分離することができない構造の多色の文様織物を意味する。九条袈裟に用いられた錦を顕微鏡で確認すると、平安様緯錦の構造である。平安様緯錦は、中国・遼墓出土錦や京都の神護寺経経帙錦など東アジア独自の構造をもつ錦で、中国でも 1100 年代半ば以降には製作されなくなっている。つまり九条袈裟は、無準師範の時代以前の中国で製作されてから歴代の祖師に受け継がれ、1202 年生まれの円爾に伝わった可能性が高いことが窺える。

4　おわりに

基準作を見定めるために様々な作品の調書を取ってきたが、最近考えることがある。例えば打敷の裏に記された人を調べるなかで、東福門院を中心とする侍女たちの精神的なつながりや関係性に気づかされた。また袈裟は権威を象徴する衣服なので、袈裟をめぐり様々な伝説が残されている。東福寺の開山堂の上層に「伝衣閣」という建物を建ててまで九条袈裟を大切に守ってきたことの意味にも思いを致すべきだろう。染織品を染織史の面からだけではなく心性史、心の歴史という意味でも考える必要があるのではないか。単なる作品としてだけでなく、400 年前、800 年前の〈衣〉を残してきた人々の〈心〉を含め、今後は研究していきたい。

〈感想〉
まず博物館展示品に添えられている題箋にこのような奥深い考証が秘められていたことがわかり驚きました。また打敷に使われた小袖から、肩山の割り出し、コンピュターグラフィックスを駆使して原形を再現された技法などに最新情報の確かさを観ました。
前回に続き今回も桜蔭会本部ＩＣＴチームのご協力を得て Zoom による同時配信を行いました。心より感謝申し上げます。オンライン参加者から音声が聞き取りにくいというお声も頂戴しました。次回以降改善に努めたいと存じます。(H.Y)